

・この子が見つけた力
五年生

鏡の間

◇日記から◇

△八月十三日▽

貝がある。とってもかわいい小さな貝。
そのうち、ヒヨコヒヨコ動き出す。

いつも、お家に入っている。

いつも、ひっこししているよ。

小さい、小さい、ヤドカリさ。

とっても、かわいい ヤドカリさ。

チヨコ、チヨコ歩いてどこへ行く。

海にいるおかあさんの所へ帰るのかい。

ここから、歩いて遠すぎる。

そのうち、きつと帰らせてあげるから、

それまで、生きて、待ってね。

△八月二十一日▽

花やさんが、苗についているイモ虫を取って、殺している。花についている虫だって、生きる権利はあるはずだ。それなのに、本など見ると、虫など生きる権利などないかのようになっています。花を守るため、一つの命を守るために、一つの命をけす。

花は、うつくしく、ぼくたちの目をたのしめてくれます。虫だってへりつつあるので、保護する所まで、でているというのに……。

世の中、うまく、いかないものですね。

△十月二十日▽

先生に、いま出している日記は、本当の日記ではあ

りません。人には言えない心のすみにあるしこりを取り去ってくれるのが日記です。だれにも言えない事をうちあけられるのが日記です。先生に見せていたのは、どうしても書けないことが沢山あります。先生は「ありのままの自分をたたきつづける」とおっしゃいますが、人には、かくしておきたい「自分」というものは、だれしもあるはずです。自分のなやみや心配を、黙って聞いてくれて、だれにもしゃべらない、心からの友だち。それが真の日記であると、ぼくは思います。先生に書いているのは、レポートです。多少、話に尾ヒレがつくでしょう。都合の悪いことは、ほとんど省くでしょう。しかし、しょうがありません。「先生はだれにも言わない」とおっしゃられたって、先生に、そのことを知れること自体がいやなことですよ。だから、嘘日記に、本当のぼくを出すわけには、いきません。

△十月二十九日▽

毎日、嘘日記を、つけたく候えども、毎日、毎日、目のまわるほどの多忙、ご推察ねがいあげ候。本日は一刻のひまをぬすみ、「蠅村の飄簾」を書かんと、存じ候ところ、あいにく、ストーリーうかばずして、その意をはたさず、遺憾千万に存じ候。吾輩は、近年、食べ過ぎによる腹痛が少なからずして、いくら食べても、消化器に、異状をきたさぬ方法を研究せんと存じ候。歴史家の説によれば、ローマ人は、日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度三度も、方丈の食饌につき候えば、いかなる健胃の人にも、消化機能に、不調をかもすべく、したがって、自然は、しかるに、ぜいたくと衛生とを、両立せしめんと研究しつくした彼らは、不相当に多量の滋味をむさぼると同時に、胃腸を常態に保持するの必要をみとめ、ここに、一つの秘法を案出いたし候。彼らは、食後、必らず、入浴いた

し候。入浴後、一種の方法によりて、浴前に、嚥下せるものを、ことごとく、嘔吐し、胃をそうじいたし候。胃内廓清の功を奏したるのち、又、食卓につき、あくまで、珍味を、風好し、風しおわれれば、又、湯に入りて、これを吐出したし候。かくのごとくすれば、好物は、むさぼりしだいむさぼり候も、毫も、内臓の諸機関に、障害を生ぜず、一挙兩得とは、これらのことを申すべきかと愚考いたし候。よって、この間じゅうより、ギボン・モンセン、スミス等諸家の著述を涉獵いたしおり候えども、今だに、発見の端緒をも見いだし得ざるは、残念のいたりに存じ候。

しかし、ご存じのごとく、小生は、一度、思いたち候ことは、成功するまで、決して、中絶つかまつらざる性質に候えば、嘔吐法を、再興いたし候も、遠からぬうちにと存じ候。

草々不備